



pp. 1-15

報告

隠岐でのフィールドワーク，歩み出し

隠岐は世界のジオパーク

発行：2026年3月31日

安田 裕子 (立命館大学 総合心理学部)

連絡先：安田 裕子 (E-mail: yyr10067@fc.ritsumeikan.ac.jp)



pp. 1-15

Report

Fieldwork in Oki, The First Steps

Oki is a UNESCO Global Geopark

Published: March 31, 2026

Yuko Yasuda (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

Correspondence concerning this article should be sent to:
Yuko Yasuda (E-mail: yyr10067@fc.ritsumeikan.ac.jp)

隠岐でのフィールドワークを 神社めぐりからはじめる

島根県にある隠岐諸島は、島根半島の北 40～80km の位置にあり、日本海に点在する、4つの有人島と 180 あまりの無人島からなる。島後と島前の地域に分かれており、島前は、西ノ島、中ノ島、知夫里島からなる。自治体としては、島後には隠岐の島町が、島前には、西ノ島町（西ノ島）、海士町（中ノ島）、知夫村（知夫里島）がある。また、各自治体のウェブサイトによれば、人口は、隠岐の島町では 12,788 人（男性 6,336 人、女性 6,452 人、世帯数 6,788 世帯：2025 年 12 月 31 日時点）（隠岐の島町役場 2026a）、西ノ島町では 2,422 人（男性 1,226 人、女性 1,196 人、世帯数 1,449 世帯：2026 年 2 月 28 日時点）（西ノ島町役場 2026）、知夫村では 569 人（男性 286 人、女性 283 人、世帯数 347 世帯：2025 年 3 月 1 日時点）（知夫村役場 n. d.）、海士町は約 2,260 人（2025 年時点）（島根県地域振興部中山間地域・離島振興課 n. d.）である。

2025 年 9 月末、島後の隠岐の島町に滞在しはじめた私のフィールドワークは、自転車を漕いで訪れる神社めぐりからスタートした。隠岐の島前・島後には、大小あわせて 150 社以上の神社があり（江戸時代には 300 以上であったともいわれている）、また、4 社の名神大社がある。927 年に編纂された『延喜式神名帳（えんぎしきじんみょうちょう）』に記載された神社のことを式内社というが、式内社のなかでも特に由緒正しく靈験にすぐれた神を祀る格式の高い神社を、名神大社という。隠岐にある 4 社の名神大社とは、水若酢（みずわかす）神社（隠岐の島町）、伊勢命（いせみこと）神社（隠岐の島町）、由良比女（ゆらひめ）神社（西ノ島町）、宇受賀命（うづかみこと）神社（海士町）である。島根県内には、出雲大社と熊野大社の 2 社を含めてあわせて 6

つの名神大社があるが、そのうちの 4 つが隠岐にあることになる。

神社めぐりからフィールドワークをはじめたのは、数多くある神社を訪れ地理的・歴史的特徴に触れることで、隠岐の島町の魅力の一端をしり、近づくことができるのではないかと考えたからである。もっとも、隠岐の島町の大きさ—面積は 242.83km²（立命館大学大阪いばらきキャンパスがある大阪府茨木市の面積 76km² の 3 倍超）、外周は 151 km—からして、自転車で回ることのできる隠岐の島町の神社の数は限られている。しかし、『隠岐 島前・島後神社 Map』（一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 2019-2020）（写真 1）と Google マップアプリをダウンロードした iPhone をたよりに、道すがら出会う人に尋ねつつ、目指す神社を探しながらめぐりなかで、自身の生活圏のひとまわりもふたまわりも広い範囲にわたる地理がわかるようになってくることは、新鮮でまたおもしろかった。

『隠岐 島前・島後神社 Map』を広げ、今日はこのあたりにしようと目星をつけて、目指す神社にたどりついては参拝し、また次の神社へと向かう。そうしたなかで、自転車を漕ぐ身体感覚も手伝って、Map 上の点がつながりリアルな現場（フィールド）感を伴うかたちで、隠岐の島町が少しずつ立体的になってきた。石岡（2024）は、フィールド調査をどのように進めるかという方針にかかわることのひとつとして、「興味を持った文化の歴史や社会的条件について、きちんとした知識を身につけること。そのため、まず墓地、市場、旅館、教会といった場所を訪れるのがよい」（石岡 2024：50）と述べている。隠岐の島町に数多くある神社をまずは訪れようという発想は、フィールドワークを進めるうえでの第一歩としては、間違っただけではなかったようである。実際、そうしたなかで、神社が、集落の中やそば、そして集落の背後の林・森や山の中にあること、巨木が御神体として祀られていることが多いことなどがわかってきた。それとともに、

写真1 『隠岐 島前・島後神社 Map』の島後の面



(発行元) 一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構

神社と自然環境と集落・人の暮らしとがいわば地続きになっているような感覚をつかむまでに、さほど時間はかからなかった。言い方を変えると、神社が、自然環境と人・地域をつなぎ、また人と人や人と地域をむすぶ機能をもっているのではないかと、ゆるやかではあるが考えるようになった。

森の中を歩き、 丘の上の神社にたどりつく

とりわけ、林・森の中にあるという点で、印象深い神社のひとつに国府尾（こうのお）神社がある。国府尾神社の拝殿は、その麓の道路に立つ鳥居（写真2）から、500 mの参道を登っていった丘陵上に存在する。つまり国府尾神社を参るには、森の中の道を登っていくことになる。国府尾神社がこうした小高いところにあるのは、

もともとは、八尾（やび）川の河口にそびえる城山の丘陵上に築かれた守護の居城である国府尾城の、鎮守社として建てられたものだったことによる。鎮守社とは、その地を鎮めて守護する、特定の地域や集落、寺院、城などの安全を守るために祀られた神社を指す。国府尾神社の、地域における現在の機能を論じるには調査が不足しているが、そうした建立の経緯を踏まえれば、国府尾神社が自然と隣りあわせにある人びとの暮らしを緩やかに支える役割を果たしているように思われる。もっとも、当地に長らく住んでいる人びとにとっては、日常であるがゆえに意識されにくいことかもしれない。しかし、島外から中間（6か月ほど）の予定で現地に滞在し、現場（フィールド）の魅力を知ろうとする立ち位置だからこそ、見えてくることがあるだろう。

森の中を登りきってたどりついた国府尾神社の拝殿のある丘からは、隠岐の島町の西郷地区の、静かに流れる八尾川とそこにかかる西郷大橋

写真2 國府尾神社の麓の鳥居



写真3 國府尾神社から眺める八尾川と西郷大橋



を一望することができる（写真3）。西郷大橋を渡った向こう側には、隠岐諸島に唯一の隠岐空港（隠岐世界ジオパーク空港）がある。隠岐空港は、隠岐の地質や地形の成り立ちとの関連で、その存在を位置付けることができるのが興味深い。

國府尾神社を背にして小高い位置から眺めると、町中を眺め渡すほどではないにせよ、隠岐の島町をしるうえでの観点がまたひとつ増えたように思えた。先にあげた石岡（2024）は、フィールド調査の進め方のひとつとして、「調査地の広場や家屋の地理的イメージを得ること。調査地域を歩きまわり、教会の塔や丘に登ること」（石岡 2024：50）の重要性も述べている。この

ことに照らしても、歩み進めた丘の上の神社から眼下に町を見ることができたのは、はじめてフィールドワークを行う私にとって示唆的なことであった。なお、石岡（2024）は、エスノグラフィ調査を進めるうえでの重要な指針として、オーストリアの社会学者であるローランド・ギルトラーの著作『フィールド調査の十戒』に記載されている十戒を6つに絞って紹介しているが、本報告であげているのはそのうちの2つである。

八尾川と西郷港を行き来する

さて、隠岐の島町の西郷地区の中心を流れる八尾川は、隠岐の島町の最大級の川である。八尾川では、古くから増水による氾濫や、渇水による水不足、水難事故があり、人びとは悩まされてきたという。そのため、八尾川をはじめ島内の川には水にまつわる伝承や文化が多く存在し、水に関する信仰が篤い。隠岐の島町港町にある水祖（みおや）神社の主祭神は水の神様である罔象女神（みつはのめのかみ）であり、道路をはさんで八尾川の前に位置する水祖神社の存在は、当地における水にかかわる信仰のありようを表しているように思われる。なお、水祖神社は、後に学問の神とされている菅原道真が祀られたため、地域では「天神さん」と呼ばれて親しまれているという。

また、隠岐の島町西町には「福かっぱ大明神」という河童の祠が存在する（写真4）。この祠は、屋号「唐人屋」である松岡家に代々伝わる河童伝説の河童を神格化させ、12代目当主松岡弥太郎が、1962（昭和37）年に地域のために祀ったものである（藤原 2018）。やはり八尾川がその近くを流れているが、唐人屋久兵衛がきゅうりを盗むカッパをこらしめて今後悪さをしないと約束させた、という話が伝わっている。またそうしたことから、川に入るときに唐人屋の子孫であることを名乗ると足を引かれないとのこと。こ

ういった八尾川をめぐる歴史や伝説からも、川（自然環境）とともにある地域とそこでの信仰、そうしたことに映し出される地域への人びとの愛着をとらえることができる。

写真4 福かっぱ大明神



福かっぱ大明神からさほど遠くはない、八尾川に架かる「愛の橋」についても紹介しておきたい。愛の橋は、八尾川沿いで金物店をしていた藤原金一が、1929年（昭和4年）に、行商で蓄えた私財を投じて作り寄贈した橋であるという。クリスチャンであった藤原金一は、悪天候のなかを通学する児童の姿を見て、「汝の隣人を愛せよ」という聖書の言葉から、橋をつくり「愛の橋」と名付けたとされる。なお、現在八尾川に架かっている愛の橋は、1956年（昭和31年）に補強されたものであるが、2018年（平成30年）3月15日より、老朽化にともない全面通行禁止となっている。

また、八尾川の河口には、古くから天然の良港として発展してきた西郷港がある。西郷港は、江戸時代中期～明治30年頃、北前船の風待ち港として栄えた歴史を有する。多い年には、西郷港だけでも年間2,000隻以上の船が、そして隠岐全体では4,500隻もの船が停泊したとされる。

祭を守り、人・地域をつなぐ

隠岐の島町東町にある御碕（みさき）神社もまた、石の階段を上った少し高いところにある。御碕神社を囲む森は、1977年（昭和52年）に町指定天然記念物に指定された当初、クロマツ、シイ、イヌマキの巨木、ヒメコマツの大木などもあり、鎮守の杜として神域を構成していた。後に、周辺の災害対策工事などのためやむをえず伐採されたが、現在も暖地性植物であるタブノキの巨木が多く残っており、目通り周囲が350cmに達する大木もあるなど、今後も守り残していくべき貴重な文化財として認識されている。地域の集会所が御碕神社に向かう階段の中腹にあること、御碕神社が災害時などの一時避難所になっていることも、地域における神社の役割という観点から、特筆しておきたいことである。

御碕神社は、3年に一度行われる神幸祭で、神幸行列にあわせてだんじり舞が披露されることでも知られている。御碕神社祭礼宇屋だんじり舞風流は、1803年（享和3年）の御碕神社遷宮の際に奉納されたことをはじめとする。当地に流刑となった、大阪の奉行所の与力であった黒崎又五郎と隠岐の島町東町の屋号「板屋」である庄屋との合作であると伝えられている。太鼓をたたく4人の子どもたちを乗せた太鼓台（だんじり）を大人が担ぎ、町内を練り歩く。大人が声を張り上げて歌い、だんじりに結びつけられた4人の子どもが太鼓をたたきながら合いの手を入れる。若者たちがかけ声をかけてだんじりを舞うように揺る様子は、ひとつの踊りのようでもあるという（島根県古代文化センター2019）。1975年（昭和50年）に町指定無形民俗文化財になっている。御碕神社もまた、地域の人びとにとって身近な存在であり、地元の祭や行事を行ううえでの重要な機能を有し、地縁をはぐくむ役割を果たしているという点で、神社のひとつ

の典型例として，とらえることができる。

光連盟 n. d.)。

隠岐を開拓した神々が集まる

玉若酢命（たまわかすみこと）神社もまた，隠岐の島町を代表する神社である。島の開拓にかかわる神と考えられている玉若酢命を主祭神とする。玉若酢命神社は，隠岐の総社として創建された神社であり，億岐家が宮司を代々務めている。なお，億岐家住宅が玉若酢命神社に隣接しており，億岐家住宅も外観のみ見学できるようになっている。億岐家住宅敷地内にある宝物殿には「駅鈴（えきれい）」「隠伎倉印（おきそういん）」「唐櫃（からびつ）」といった国の重要文化財が展示されていることから名高い。そして，玉若酢命神社の本殿は「隠岐造」であり，屋根が出雲大社の大社造，向拝と呼ばれる庇の部分が春日大社の春日造，間取りや柱の建て方が伊勢神宮の神明造，という3つの神社の建築様式をあわせていることを特徴とする。

玉若酢命神社では，毎年6月5日に，隠岐島後三大祭のひとつである御霊会風流（ごれえふりゅう）の行事が行われている。その最大の呼びものである，午後に行われる「馬入れ（うまいれ）神事」は，参道を馬と人が一気に駆け上がる勇壮な行事であるという。隠岐の国守が，隠岐中の神社にお参りするかわりに神々を隠岐国の総社である玉若酢命神社に集め，そのとき神々が馬に乗って参集したということから「馬入れ」の行事が行われている。現在では，8頭の神馬が島後・隠岐の島町の8地区から参加する。神馬とは，日本の神社に奉獻される馬，あるいは祭事の際に使用される馬のことである。それぞれ6人の引き手によって，8頭の神馬が随神門前から一気にかけぬけるありさまは，もうもうとたちのぼる砂煙，馬のいななき，引き手のかけ声，見物人の歓声があがり，御霊会風流のなかでも圧巻の催しであるという（公益社団法人 島根県観

隠岐古典相撲を受け継ぐ

水若酢神社もまた隠岐の島町を代表する神社で，隠岐一宮（いちのみや）である。玉若酢命神社と同じく本殿は「隠岐造」である。そして，水若酢神社は，『延喜式神名帳』に名神大社として列せられた格式高い神社であることも，再度述べておこう。

写真5 水若酢神社の土俵



相撲が盛んな隠岐では各地区に土俵があるが，水若酢神社境内の土俵（写真5）は格式が高いことでも知られている。隠岐に特徴的な伝統のひとつに「隠岐古典相撲」がある。第1回隠岐古典相撲は，1972年（昭和47年）11月3日に，水若酢神社大鳥居竣工奉納として開催された。そして，1983年（昭和58年）11月3日には，第6回隠岐古典相撲が，水若酢神社本殿葺替工事竣工祝賀奉納として開催されている。この大会は，川上健一による小説『渾身』のモデルとなったという（後に『渾身 KON-SHIN』として，錦織良成の監督・脚本により映画化された）。隠岐古典相撲は，その伝統を受け継ぐべく，公共事業の竣工などの際にも執り行われている。2006年（平成18年）7月8日には，新隠岐空港開港祝賀奉納として，第12回隠岐古典相撲が開催

された（写真6）。小型ジェット機が就航可能な2000 mの滑走路が整備され、供用開始されたのが2006年（平成18年）7月6日であった（島根県 n. d.）。そして直近では、2024年（令和6年）9月14日-15日に12年ぶりに、隠岐の島町町政20周年記念として、第15回隠岐古典相撲が開催されている。当初は2020年に開催が予定されていたが、新型コロナウイルスの影響により延期され開催されたものであったという（隠岐の島町 2025；隠岐の島町役場 2026b）。

隠岐古典相撲にはいくつものユニークな特徴がある。それは右のようにまとめられている（隠岐ジオパーク推進協議会 2012：155 一部修正）。一度、現地で開催される隠岐古典相撲を観てみたいものである。

1. 神社の遷宮や大型公共事業の完成記念として開催する。（銚子ダム、隠岐空港、隠岐病院）
2. 夜を徹して行われる。（夕方から始まり、終わるのが次の日の午後）
3. 大きな大会では力士が200人以上参加する。
4. 取り組みは、割り相撲、五人抜きなど数百番行われる。
5. 最高位が大関である。（元々横綱という地位はなく、隠岐は古い形を残している）
6. 二番勝負で行われる。（一番目の勝者は、二番目に勝ちを譲る）
7. 役力士（大関、関脇、小結）には、栄誉の品として土俵の柱が与えられる。
8. 水若酢神社で行われる場合、土俵は三枚土俵である。（鏡餅のような形をしていて、高くなっていることから見やすくなっている）
9. 前日には五穀豊穡を願い土俵祭りが行われる。
10. 力士も塩を撒くが、応援者も大量に力士に塩を浴びせる。
11. 行事の口上が1時間近く行われる。

写真6 新隠岐空港開港祝賀奉納として開催された第12回隠岐古典相撲



イカを寄せる

さて、水若酢神社の他に隠岐諸島には名神大社があと3つ、隠岐の島町に伊勢命神社が、海士町に宇受賀命神社が、そして西ノ島町に由良比女神社があることを先に述べた。ここではもうひとつ、イカの伝説で知られる由良比女神社を紹介しよう。由良比女神社もまた隠岐一宮でもある。

由良比女神社の主祭神であるユラヒメノミコト（由良比女命）が、芋桶（おぼけ）に乗って海を渡っていた時、海に浸した手にイカが噛みついた。そのお詫びとして、由良比女神社の目の前の浜には、毎年大量のイカの群れが押し寄せたようになったとされる。そのため村の人たちは、カゴですくったり手づかみで拾うようにしてイカをとることができた。昭和にはいつからか、大量のイカが浅瀬に打ち上げられるほど押し寄せたことがあったという。由良比女神社の境内の灯籠や拝殿には、イカの彫刻がほどこされているのを見ることができる（写真7）。

写真7 由良比女神社のイカの彫刻



イカは、隠岐の名産のひとつである。先述の、隠岐の島町の水祖神社を背にして目の前に流れ

る八尾川にも、集魚灯を複数吊り下げた小型のイカ釣り船が停泊している様子を眺めることができる（写真8）。夏から秋にかけて、隠岐近海では、イカ釣り漁業の漁火が海を照らしている美しい光景を、見ることができるという（一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 n. d.）。もっとも近年は、残念なことに、気候の変化などによりイカの漁獲量が減少傾向にある。

写真8 八尾川に停泊するイカ釣り船



黒曜石によりひらける

フィールドワークにおける足どりをもとに、いくつかの神社をたどってきたが、そもそも隠岐に神社が数多くあるのは、隠岐を中心とした黒曜石による交流があったことによるのではないかと、という解釈がある。すなわち、各地の勢力をもった人びとが黒曜石を求めて隠岐に入り、それぞれに国を造り神社を建立したことが、隠岐の神社の多さと関係しているのではないかと、いうものである。

黒曜石は火山活動によって溶かされた流紋岩質マグマが、急激に冷やされることで生成される。外見は黒く（茶色、また半透明の場合もある）ガラスとよく似た性質をもち、脆いという欠点はあるが割ると鋭い破断面を示すことから、先史時代より世界各地でナイフや矢じり、槍の穂先などの石器として使用された。日本に目を向ければ、3万年前の旧石器時代から縄文時代に

かけて石器として用いられ、弥生時代には矢じりや石斧などに加工され、古墳時代になってからは祭祀の道具として使われていた。

隠岐の黒曜石（写真9）は西日本随一といえるほどの産地を誇り、今の中国地方・近畿地方をはじめ、南は四国の瀬戸内側、東は北陸地方や新潟県の糸魚川辺りまで運ばれていたとされる。黒曜石が運ばれたルートが、後の街道（都市間をむすぶ主要道路）や海道（海岸沿いの主要道路）になっていることから、黒曜石を求めて多くの人びとが隠岐に向かう道を行き来することにより、隠岐が物流や文化の中継地点として栄えていたとも考えられている。

写真9 黒曜石による工芸品



遠島の地になる

隠岐はアワビの産地としても広く知られてもいた。奈良時代から盛んに作られた隠岐の干しアワビは、最高級品として認識されていたという。最高級品であるとされていたのは、海藻がよく育つ海域であることによる味の良さもさることながら、当時の陰陽道の思想により、隠岐

は都から吉祥の方角（北西の方角）にあたるためであった。かかわって、天皇の即位式の供え物や高級役人のボーナスとして、干しアワビが支給されていた。隠岐が北前船の風待ち港として栄えた江戸時代中期～明治30年頃には、隠岐の干しアワビや干しナマコは長崎出島に運ばれ、長崎俵物三品（干しアワビ、干しナマコ、フカヒレ）として中国との貿易の主要品となっていたという。

このように隠岐が都から吉祥の方角にあったことは、小野篁（おののたかむら）、後鳥羽上皇、後醍醐天皇といった身分の高い人が隠岐に遠島に処されていることとも関係する。流刑の地のひとつとしてもよく知られている隠岐は、地理的に都から遠く離れつつも、黒曜石にみるように旧石器時代からの歴史が残る島であること、身の安全と食が保障される豊かな土地であったこと、そして、都から縁起の良い方角に位置することから、遠流の地として選ばれたのではないかともいわれている（なお、江戸時代中期以降は、一般の罪人も多く流されている）。ここで、小野篁、後鳥羽上皇、後醍醐天皇の、隠岐への配流にかかわるそれぞれの背景を表1にまとめておこう。

牛突きを受け継ぐ

現在、隠岐の島町で受け継がれている伝統的な行事のひとつに、牛突きがある。牛突きは、承久の乱で中ノ島に配流となった後鳥羽上皇が、元気な子牛と子牛が牧畑で角を突き合わせて戯れている光景を興味深く見ていたことから、村の人たちが後鳥羽上皇をお慰めしようと、強そうな雄牛を集めて闘わせたのがはじまりとされる。

ここで牧畑について説明しておこう。牧畑とは、島前の知夫里島や西ノ島で1960年代後半まで営まれていた、隠岐独自の農法である。知夫里島では「ミョウガキ」と呼ばれる石垣で区画

表1 隠岐に遠島となった背景

小野篁	834年(承和元年)に、遣唐副使に任ぜられ、836年(承和3年)と翌837年(承和4年)の2回にわたり出帆するが、いずれも渡唐に失敗する。838年(承和5年)の3度目の航海にあたり、正使である藤原常嗣が、自分の破損した船に小野篁を乗せ、小野篁の船に藤原常嗣が乗ろうとし、その横暴に小野篁が反発して船に乗らなかった。乗船しなかったことが嵯峨天皇の怒りにふれ、配流の身となった。小野篁は、はじめに島前・中ノ島に住み、後に島後にわたり、在島は1年2ヶ月ほどである。小野小町は小野篁の孫といわれている。百人一首に収録されている歌「わたの原 八十島かけて漕ぎ出でぬと 人に告げよ 海人の釣船」は、小野篁が流罪となって隠岐へ出発するときに、都の人に詠んで贈ったものである。
後鳥羽上皇	1221年(承久3年)に、鎌倉幕府の執権である北条義時に対して起こした対立抗争で敗れ(承久の乱)、配流となった。後鳥羽上皇は、島前・中ノ島で19年間過ごし、この地で生涯をとじた。和歌と刀剣に深い情熱をもつ文化人でもあった。隠岐神社は、島根県が、その御神徳をひろめるために創建し1939年に完成した。1939年は、後鳥羽上皇の崩御700年にあたる年で、同年に「後鳥羽天皇七百年祭」が執り行われた。
後醍醐天皇	1324年(正中元年)に正中の変と呼ばれる討幕計画を企てるも成功せず、その後再度1332年(元弘2年)に倒幕を計画したが元弘の変で失敗し、隠岐に配流となった。隠岐における後醍醐天皇の御所についてはふたつの説がある。ひとつは島前・西ノ島の黒木御所である。関係史料を展示する碧風館(へきふうかん)や黒木神社が建っている。もうひとつは島後の隠岐国分寺であり、後醍醐天皇行在所跡の碑が建っている。前者の説が有力とされているようである。後醍醐天皇は1333年に隠岐から脱出し、その後幕府を滅ぼし、「建武の新政」という新たな政治体制を樹立した。

を分け(西ノ島では石垣を「アイガキ」と呼んだ)、集落ごとに共同管理して、4年のサイクルで、麦や小豆、アワ、ヒエなどを順番に栽培していた。また、休耕地に牛や馬を放牧し、排せつする糞を自然の堆肥とすることで土地の力を維持していたという。火山活動によって形成されたことから、とりわけ島前は平地が少なく、また表土が薄く痩せた土地であったため、上のような四圃式(よんぼしき)農業を行い、山頂付近まで畑を耕していた。ちなみに、その一方で、やはり火山活動によって形成されたことによる「島前カルデラ」という特徴的な地形により、穏やかな内海側では港が発達し、漁業の盛んな地域となっていることを記しておく。

話を牛突きに戻そう。牛突きは、中ノ島に限らず隠岐全島で伝承され、明治時代までは隠岐全域で行われていたという。しかしその後、社会の発展による農耕牛の減少や畜産牛の拡大により衰退し、現在は、隠岐の島町においてのみ受け継がれている。牛突きは、牛と牛とが角を突き合わせて闘い、どちらか一方の牛が戦意を喪失し逃げることで、勝敗がつけられる。牛突きで闘う際の基本技には「あげ」「押し(押し合い)」「はらき(向かう突き)」があるという。一般社団法人隠岐の島町観光協会が発行している観光牛突きのリーフレット(一般社団法人 隠岐

の島町観光協会 n. d.)から転記する。

あげ：一瞬の隙をついて回りこみ、相手の首筋、前足の付け根、さらには脇腹を突き上げる
 押し(押し合い)：頭と頭を合わせ、角をがっちり組み合せて、両牛が力いっぱい押し合う
 はらき(向かう突き)：真正面から相手の角を左右にはらきながら、額を攻める

隠岐の牛突きの特徴は、牛に鼻綱をつけたまま闘わせ、対戦の間ずっと綱取りと称する者が牛を鼓舞しリードするところにある(写真10)。綱取りがつく理由としては、発祥のきっかけとなった中ノ島で、後鳥羽上皇に牛の危害が及ばないようにするためと、大切な牛をなるべく傷つけず成長させるためであるとされる。綱取りが牛を鼓舞・リードすることによって、牛は本来の力を発揮することができるのだという。

現在は、隠岐の島町の西郷、五箇、都万の3つの地区で牛が飼育され、年に数回、8月から10月にかけて本場所大会が開催される。8月15日には、隠岐国分寺外苑にある隠岐モーモードームというドーム型牛突き場で、そして9月第一日曜日には都万の八朔牛突き大会(佐山牛突き場)が、10月第二日曜日には五箇の一夜嶽(いちやがだけ)牛突き大会が執り行われる。一夜嶽牛突き大会は、五箇地区の一夜嶽神社の奉納

写真10 隠岐モーモードームでの観光牛突き



神事として、一夜嶽神社旧社殿の前の一夜嶽牛突き場で行われる。牛突き場のある岳山は、「岳野」という平地に一夜で山が盛り上がったとされることから、この地が「一夜嶽」と呼ばれるようになったという伝説がある。また、都万地区の八朔牛突き大会は、都万村那久（なぐ）の深山に鎮座する壇鏡（だんぎょう）神社の祭礼、八朔祭りの奉納として開催される。

神聖な場に島の特徴を垣間見る

ここでもうひとつ、壇鏡神社を案内しよう。壇鏡神社は、岩壁の左右に流れ落ちる高さ 50 m の雄滝と 40 m の雌滝の間に鎮座する（写真 11）。壇鏡神社と壇鏡の滝に通じる参道は、見上げるような杉が数多く立ち並ぶひんやりとした空気感のなかにあり、まるで精霊が宿っているような神聖で幻想的な雰囲気が漂っている（写真 12）。壇鏡の滝は、小野篁が都への帰還を願って打たれ、その願いが叶った滝として知られている。それゆえ、壇鏡の滝の水は、飲むと勝負事に勝つ「勝利の水」ともいわれ、牛突き大会や相撲の試合を迎える前日には、関係者が壇鏡の滝の水を汲みに訪れるという。また、その縁起の良さから、正月前に壇鏡の水を汲みに訪れる人もいと聞いた。そして、壇鏡神社や壇鏡の滝に通じる参道そばの溪流には、オキサンショウウオが生息

写真11 壇鏡神社と壇鏡の滝（雄滝）



しているとされる。

オキサンショウウオは、島後のみに生息する隠岐の固有種である。成体の全長は 12 ～ 13 センチメートル、寿命は約 20 年である。サンショウウオには、溪流などの流水環境で過ごす種（流水性）と池沼などの止水環境を利用する種（止水性）がある。オキサンショウウオの幼生は、溪流や沢などの流水環境に生息しているが、幼生

写真 12 壇鏡神社への参道に通じる鳥居



に爪がないなどの止水環境に生息する他種のサンショウウオに共通する特徴ももつという（佐藤 1940）。また、遺伝子解析の結果から、オキサンショウウオは同属のカシミサンショウウオなどの止水性のサンショウウオに近縁であることが示唆されている（Matsui, Nishikawa, Misawa, & Tanabe 2007）。こうしたことから、もともと流水性だった祖先種が止水性に進化した後、再び流水性に進化したと考えられており（Matsui et al. 2007；高原・藤田・吉田・秋吉 2019），後述するような、最終氷期の過程で隠岐が何度も島根半島と陸続きになったり離島になったりしたことによる生息環境の変化に生物が適応してきたことのひとつの例として示すことができる。そして、壇鏡の滝に見るように、島後の西側に多くある断崖絶壁が、火山活動によって島が形成された時代の火山岩が浸食・崩壊してできたものであるということも、島の成り立ちと関連することである。

火山活動によって形成される

隠岐は、約 600 万年前に大規模な火山活動によって海底から隆起し形成された島である。

さかのぼること約 2500 万年前、地溝帯運動によって、後の日本列島となる大地が、ユーラシ

ア大陸から南東に向かって分離・移動した。地溝帯とは、地殻変動によって生じる地形であり、地殻の一部が沈降して長く低い地形として形成された帯状の地質構造を指す。大地が分離し移動して、そこに雨がふって水がたまり、大陸と日本列島の間には細長い湖が形成された。その後も日本列島の移動が続き、割れ目はしだいに大きくなり、やがて海水が入りこんで約 1800 万年前頃には湖が海になった。

そして約 600 万年前、大規模な火山活動によって海底から隆起し、隠岐が島としてかたちづくられた。具体的には、630 万年前に溶岩が噴出して島前が、次いで 550 万年前に溶岩の噴出により島後が形成された。島前では、溶岩が元の島を完全に覆ったあと、マグマが噴出して空洞となったマグマだまりに対して島の中心部が陥没し、大きなくぼ地となった。そして 540 万年前にはカルデラの中央部で火山が噴出し火砕丘が形成され、その後の浸食によって海水がくぼ地に入り込み、現在のようなカルデラの海になったという。これを「島前カルデラ」と呼ぶ。そして、カルデラ中央部の火山噴火によってできた火砕丘が火口の内側に堆積し、島前・西ノ島には焼火山（たくひやま）が形成された。なお、焼火山の山頂近くに建立された焼火神社は、火砕岩の岩体を開いた岩屋に本殿が建てられており、江戸時代には北前船の関係者によって海上安全の神として崇められていたとのことである。

植物や生物の固有性の基盤がうまれる

火山活動が終わった後、島後は一部が海に沈んだが、すぐに新しい噴火活動によって隆起し、溶岩でできた台地があちこちに形成された。この新しい火山活動は 420 万年間続き、その火山活動の終了と前後して、70 万年前頃から本格的な氷期サイクルが始まった。氷期サイクルによって 100 m 以上も海面が上下し、約 2 万年前に最寒

冷期を迎えた最終氷期には 120 m～140 m も海面が低下した。隠岐諸島と島根半島との間、隠岐海峡は水深約 70 m の浅い海でつながっているが、この氷期サイクルの過程で隠岐は何度も本州とつながり半島になったという。そして、その後の温暖化に伴う海面の上昇により約 1 万年間に現在のような離島となったのである。

地中に埋まった過去の花粉の分析結果から、最終氷期の最寒冷期であった約 2 万年前、スギは温暖な伊豆半島周辺、紀伊半島南端、四国南端、屋久島、若狭湾周辺から隠岐にかけての地域に逃避していたことが明らかにされている (Tsukada 1982; 津村 2016)。日本海側の多雪地帯に生育するウラスギは、当時、島根半島と陸続きになっていた隠岐へと逃避することで生きのびたと考えられている。

スギ天然林集団の遺伝的多様性の調査を行った津村・谷・高橋・平 (2004) によれば、隠岐を含め、最終氷期のスギ逃避地近くの天然林は、高い遺伝的変異を保持していることが明らかにされている。遺伝的多様性とは、個体や集団の遺伝的な変異や組み合わせの結果として現れるものであり、広範な環境変化への適応や生態系の安定性に関与したり、新たな進化の源となるという。温暖な地域 (逃避地) に逃げ延びたスギ天然林が、再び温暖な気候になると、生育が可能な地域まで分布を北方に拡大し、氷期に温暖な地域にあった森林が起源となってそこで二次的に形成されたことにより、遺伝的多様性の高さが保持されたのだという。

このように、隠岐の成り立ちが植生に影響を及ぼしたことが知られている。隠岐に特徴的な、火山活動にはじまる大地の成り立ちの結果として、隠岐固有の生態系がうみだされている。

隠岐が世界のジオパークになる

隠岐は地域全体が国立公園に指定された自然

豊かな地域であり、2009 年 (平成 21 年) には隠岐の地質遺産が島根県初の「日本ジオパーク」に、そして 2013 年 (平成 25 年) には「ユネスコ世界ジオパーク」に認定された。ジオパークとは、ジオ (geo:地球, 大地) とパーク (park:公園) をあわせた造語である。地球科学的にみて重要な地質遺産を有することに加えて、生態系や歴史、文化など、人びとの営みと大地や地球との関係を学び体験することのできる総合的な公園を指す。ユネスコ世界ジオパークは、国際的に価値のある地質遺産を保護し、そうした地質遺産がもたらした自然環境や地域の文化への理解を深め、科学研究や教育、地域振興等に活用することにより、自然と人間との共生及び持続可能な開発を実現することを目的とした事業である (文部科学省 n. d.)。

隠岐は、ユーラシア大陸の縁辺であった時代から、湖の底の時代、深い海の底の時代を経て、今から約 600 万年前に大規模な火山活動によって誕生した。隠岐諸島の陸域 (346km²) と周辺の海域 (282.5km² = 海岸線から 1km 以内の海域面積) を足した 628.5km² 全体、つまり、海洋生物や漁業などの人の営みも含めた隠岐と隠岐を取り巻く環境そのものが、「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」となっている。

ジオパーク活動について概説しておこう。世界ジオパークネットワーク (Global Geoparks Network: GGN) は、2004 年に国際連合教育科学文化機関 (ユネスコ) の支援によって設立され、ジオパークとしての審査、認定がなされる仕組みができあがった。日本では、2008 年に国内の認定機関として日本ジオパーク委員会 (Japan Geopark Committee: JGC) が、2009 年には日本ジオパークに認定された地域と日本ジオパーク認定を目指す地域によって、日本ジオパークネットワーク (Japanese Geoparks Network: JGN) が設立された。なお、ジオパークがユネスコの正式事業になったことをうけ、2016 年 1 月 25 日に JGC は、日本におけるユネスコ世界ジオ

パーク事業の登録審査業務に関して権限をもつ機関であるナショナル・コミティとして、日本ユネスコ国内委員会より正式に認証されている。

日本ジオパークには、JGC に対して加盟申請書を提出し、プレゼンテーション、JGC 委員による現地審査を経て認定される。そして、日本ジオパークに認定されていることを条件に、新たに JGC に対して世界ジオパーク加盟申請書を提出し、プレゼンテーション、JGC 委員による現地審査を経て、JGC から GGN に加盟申請をしてもよいという推薦を受けてから、GGN に英文の加盟申請書を提出する。その後、GGN により加盟申請書の確認がなされ、GGN 委員による現地審査を経て、GGN への加盟が決定される（隠岐ジオパーク推進協議会 2012）。

こうした持続的な挑戦を経て、隠岐は、2013 年にユネスコ世界ジオパークとして認定されるに至った。ただし、ユネスコ世界ジオパークであり続けるためには、4 年ごとに更新の手続きとそれに対する審査が必須とされているという。その際、ユネスコ世界ジオパークとしての活動を維持するのみならず、審査時に受けた課題を踏まえてさらに取組みを発展させていかなければならないという厳しさがある。もっとも、人と自然との共生や持続可能な開発の実現を、研究や教育や地域振興を通じて実現しようとすることは、希望と可能性に満ちた実践でもある。

おわりに

隠岐ユネスコ世界ジオパークから、 隠岐をしり、地球をしる

隠岐ユネスコ世界ジオパークは、「大地の成り立ち」「独自の生態系」「人の営み」が関連しあっているところに、隠岐の立体的で多面的な魅力がとらえられる（一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 n. d.）。それらの関連性をひもといたり、魅せられた事象を掘り下げること

によって、隠岐を深くしることができるとともに、地球や人類への関心・理解へとつなげていくことができる。

本報告では、筆者のフィールドワークにおける足どりからいくつかの神社を軸に、隠岐のおもしろさを紹介してきた。そのなかで、人びとが生きる地域性や歴史性（「人の営み」）、火山活動を基盤に形成された地質・地形（「大地の成り立ち」）、環境適応による生物や植生の固有性（「独自の生態系」）をとらえ、またそれらの関連性に言及してきた。本報告で著述できたのは隠岐の魅力の一端にすぎないが、隠岐の外から訪れ滞りし隠岐を内側から描こうとする立ち位置だからこそ提示できた何かがあれば、それは嬉しいことである。また本報告が、人間が地球環境のなかで生かされている存在なのだということへの気づきをうながすものとなっているのなら、幸いである。

参考・引用文献

- 知夫村役場 (n. d.) 島根県隠岐郡知夫村. (2026 年 3 月 10 日取得 <http://www.vill.chibu.lg.jp/gyosei/>)
- 藤原和香 (2018) カワコ伝承と「福河童大明神」— 隠岐の島町西郷の事例. 関西学院大学卒業論文. (2026 年 3 月 1 日 (2026 年 3 月 1 日取得 <https://shimamukwansei.hatenablog.com/entry/20180119/1516347498>))
- 一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 (2019–2020) 隠岐 島前・島後神社 Map
- 一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 (n. d.) 隠岐ユネスコ世界ジオパーク. (2026 年 3 月 1 日取得 <https://www.oki-geopark.jp/>)
- 一般社団法人 隠岐の島町観光協会 (n. d.) 日本最古の歴史 800 年の伝統がここにある 隠岐牛突き
- 石岡丈昇 (2024) エスノグラフィ入門. 筑摩

- 書房.
- 公益社団法人 島根県観光連盟 (n. d.) しまね観光ナビ 御霊会風流. (2026 年 1 月 15 日取得 <https://www.kankou-shimane.com/destination/20428>)
- Matsui M., Nishikawa K., Misawa Y., & Tanabe S. (2007) Systematic relationships of *Hynobius okiensis* among Japanese salamanders (Amphibia: Caudata). *Zoological Science*, 24, 746–751
- 文部科学省 (n. d.) ユネスコ世界ジオパーク. (2026 年 1 月 18 日取得 <https://www.mext.go.jp/unesco/005/004.htm>)
- 西ノ島町役場 (2026) 西ノ島町. (2026 年 3 月 10 日取得 <https://www.town.nishinoshima.shimane.jp/>)
- 隠岐ジオパーク推進協議会 (2012) 隠岐ジオパークガイドブック. 隠岐ジオパーク推進協議会.
- 隠岐の島町 (2025) 島人を結ぶ 隠岐古典相撲, 第 15 回 令和 6 (2024) 年 9 月 14 日 隠岐の島町町政 20 周年記念 記録映像 (DVD). 株式会社メディアスコープ.
- 隠岐の島町役場 (2026a) 隠岐の島町 人口・世帯数・高齢者率. (2026 年 3 月 10 日取得 <https://www.town.okinoshima.shimane.jp/soshiki/chomin/gyomu/2/1/321.html>)
- 隠岐の島町役場 (2026b) 隠岐古典相撲記録映像「島人を結ぶ 隠岐古典相撲」の公開について. (2026 年 3 月 10 日取得 <https://www.town.okinoshima.shimane.jp/soshiki/somu/gyomu/11/6/391.html>)
- 佐藤井岐雄 (1940) 隠岐の山椒魚について. 動物学雑誌, 52, 298–309.
- 島根県 (n. d.) 隠岐世界ジオパーク空港について. (2026 年 1 月 15 日取得 <https://www.pref.shimane.lg.jp/infra/port/airport/oki/>)
- 島根県地域振興部 中山間地域・離島振興課 (n. d.) しまねの郷づくり応援サイト 海士町海士地区. (2026 年 3 月 10 日取得 <https://satodukuri.pref.shimane.lg.jp/info/area/population?sbaAreaCode=525525001>)
- 島根県古代文化センター (2019) 隠岐のだんじり—御碕神社祭礼宇屋だんじり舞風流—〈公開編・短編〉(DVD). 山陰ビデオクラフト有限公司社.
- 高原輝彦・藤田大登・吉田真明・秋吉英雄 (2019) オキサンショウウオ *Hynobius okiensis* 幼生の季節的な個体数変動と分布制限要因の解明. 保全生態学研究, 24, 83–93.
- Tsukada, M. (1982). *Cryptomeria japonica*: Glacial refugia and late-glacial and post-glacial migration. *Ecology*, 63, 1091–1105.
- 津村義彦 (2016) シリーズ 森めぐり③ 最終氷期の生き残りの天然スギ 福井県高浜町—青葉山—. 森林科学, 77, 30–31.
- 津村義彦・谷尚樹・高橋友和・平英彰 (2004) 最終氷期に逃避地として生き残ったスギ天然林は高い遺伝的多様性を保持している. アグリチャー 農業研究見える化システム. (2026 年 3 月 10 日取得 <https://agresearcher.maff.go.jp/seika/show/212639>)

謝辞

一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 業務執行理事 野邊一寛氏には、隠岐でフィールドワークなどの活動を行うにあたり、たいへんお世話になりました。また、本報告に対しても有益なご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。隠岐の島町で暮らし、活動するなかで、ご協力・ご支援をいただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

